

Title	間投助詞のスタイル切換え : 方言間の対照研究
Author(s)	篠原, 玲子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 7 P.39-P.50
Issue Date	2005-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/23205
DOI	10.18910/23205
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

間投助詞のスタイル切換え

—方言間の対照研究—

篠原 玲子

【キーワード】 間投助詞、スタイル、切換え

【要旨】

本稿では、津軽方言話者・東京山の手方言話者・京都市方言話者が用いる間投助詞を取り上げ、場面間の切換え現象、とくにフォーマル場面における間投助詞の使用に注目して分析を試みた。その結果、間投助詞の使用・捉え方は方言によって次の3つのタイプに分けられることが明らかになった。

(a) タイプⅠ (津軽方言)

津軽方言においては、間投助詞の使用自体がぞんざいさをあらわすマーカースになると考えられる。ネについては、共通語的すぎるために使用が避けられる可能性もある。

(b) タイプⅡ (東京山の手方言)

東京山の手方言においては、ネ以外の形式はぞんざいさをあらわすマーカースになる。しかし、フォーマル場面における間投助詞使用の制限は津軽方言ほど厳格でない。

(c) タイプⅢ (京都市方言)

京都市方言においては、ネ以外の形式はぞんざいさをあらわすマーカースになる。しかし共通語形ネは、デス・マスと共起するか否かに関わらず、それほどぞんざいさをあらわさない。方言形ナが存在が共通語形ネの価値を上げていると考えられる。

1. はじめに

大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のスタイル切換えプロジェクトにおいて、松丸・辻(2002)や辻(2003)では、間投助詞の形式がスタイル切換えに関与していることが指摘された。これらの分析では、フォーマル場面では方言形が避けられ、共通語的なネが用いられるといった場面による形式の対立が明らかにされた。本稿では、複数の方言間の対照を行い、このような要素のあらわれ方における方言間の違いに注目して分析を試みる。

場面によるネの使用頻度や機能の違いについては、宇佐美(1997)がディスコース・ポライトネスの観点から論じている。宇佐美は、成人女性の自然談話データから「注意喚起」の機能を持つネが、フォーマルな談話ではほとんど用いられないことを明らかにした。ま

たその使用頻度が高くなると子供っぽい、なれなれしい、押しつけがましいといったコミュニケーション機能を生むとしている。宇佐美の言う「注意喚起」のネとは次のようなものである。

- [1] ほんとに速読する人はね、岩波新書はね、2時間で読まなきゃいけないだよね。
 [2] でもねえ、九州もわたしね、長崎は一回行ったんだけど。

(宇佐美 1997: 251 より抜粋)

しかし、本プロジェクトで収録した談話データからは、フォーマル場面においても同様の機能を持つネが少なからず用いられ、また、その出現の仕方は方言によって異なることが観察できた。よって本稿では、それぞれ特徴が見られる3方言を対照し、間投助詞の出現の仕方に方言間の相違があることを示す。

以下、§2で本稿で分析対象とした資料について述べ、§3で本稿の問題とする点について論じる。§4で今回分析対象とする形式と分析方法について説明し、§5で具体的な分析をおこなう。最後に§6で本稿のまとめを述べる。

2. 資料

本稿では、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のSSコーパス ver.1.0を分析資料とする。このコーパスは日本語方言話者と日本語中間言語話者のスタイル切換えを分析することを目的として、方言話者/日本語学習者のいくつかのカジュアルな談話とフォーマルな談話を録音収録したものである。本稿では、東京山の手・津軽・京都市の若年層話者のデータを分析対象とする。なお、本プロジェクトでは老年層話者の談話も収録されているが、調査地域によって改まり度に差が大きく比較に適さないため、本稿では分析対象として扱わない。また、本稿ではカジュアル/フォーマルの差が明確な、親しい友人を話し相手とする場面と初対面の調査者を話し相手とする場面の2場面を扱う。

表1、2に津軽方言データの情報(阿部・坂口 2002: 12より抜粋)、表3、4に東京山の手方言データの情報(西原 2004: 23より抜粋)、表5、6に京都市方言データの情報(辻 2003: 2より抜粋)を示す。

[表1 津軽: インフォーマント情報]

	年齢	職業	居住歴
YA	23	教諭	0-18: 青森県弘前市 18-22: 東京都 22-: 青森県弘前市
YC	23	会社員	0-: 青森県弘前市
YF	25	学生	0-18: 兵庫県姫路市 18-: 大阪府池田市

[表2 津軽：談話情報]

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
若一若	YA-YC	同年代	42分 ^{*1}	ほぼ同量の発話
若一調	YA-YF	初対面	46分	YFが質問、YAが答える

*1 途中、内容に考慮して文字化データを公開していない部分を含む（注は篠原による）。

[表3 東京山の手：インフォーマント情報]

	年齢	職業	居住歴
YA	23	学生	0-：東京都渋谷区
YC	24	学生	0-3：東京都新宿区 3-7：シンガポール 7-19：東京都新宿区 19-20：アメリカ 20-：東京都新宿区
YF	29	学生	0-15：京都市左京区 15-23：東京都江戸川区 23-：大阪府池田市

[表4 東京山の手：談話情報]

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
若一若	YA-YC	親しい同年代	45分	同程度の発話量
若一調	YA-YF	初対面	50分	YFが質問、YAが答える ^{*1}

*1 YAの発話量が比較的多くYFの発話量を上回る（注は篠原による）。

[表5 京都市：インフォーマント情報]

	年齢	職業	居住歴
YA ^{*1}	21	営業職(織物関係)	0-：京都市中京区
YC	21	学生	0-：京都市中京区
YF	25	学生	0-18：新潟県南蒲原郡 18-23：富山県富山市 23-：大阪府池田市

*1 YAとYCは幼稚園からの幼なじみである。

[表6 京都市：談話情報]

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
若一若	YA-YC	親しい同年代	43分	同量の発話
若一調	YA-YF	初対面	44分	YFが質問、YAが答える

上記の話者記号は、はじめのアルファベットが年齢層（Y=若年層）を表し、2つ目が話者の属性（A=分析対象者、C=カジュアルな場面の話し相手、F=フォーマルな場面の話し相手（=調査者））を表す。なお、場面を表す場合には「東京山の手YAの《対調》」のように《対...》というかたちで示し、談話例をあげる場合には〔東京山の手：若一若〕のように〔地域名：談話名〕という形式で示すことにする。略語「若」は「若年層話者」、「調」は「調査者」をそれぞれ指す。また、若年層話者を話し相手とした場面を〔若一若〕、調査者を話し相手とした場面を〔若一調〕のように示す。

3. 問題のありか

下の表7は、津軽・東京山の手・京都市のそれぞれの談話資料における、共通語的なネと、それ以外の形式の出現数を示したものである。

[表7 間投助詞の出現数]

	津軽 YA		東京山の手 YA		京都市 YA	
	対若	対調	対若	対調	対若	対調
ネ ¹	-	-	61	94	1	66
ネ以外	26	-	89	-	48	-

「ネ以外」の形式としては、ナ（津軽・東京山の手・京都市）、サ（津軽・東京山の手・京都市）、ヨ（津軽）があらわれた。表7からは次のようなことがわかる。

- (1) 津軽 YA は《対若》場面では方言的なナ・ヨは用いるが、共通語的なネはまったく用いない。《対調》場面では形式に関わらず、間投助詞自体を用いない。
- (2) 東京山の手 YA は《対若》場面ではナ・サと、ネを両方用いる。《対調》場面ではネのみを用いる。
- (3) 京都市 YA は《対若》場面ではほぼ方言的なナのみを用いる。《対調》場面ではネのみを用いる。

これらの話者は、ネの使用に注目すると次のようにタイプ分けすることができる。

タイプⅠ：場面に関わらずネをまったく用いないタイプ（津軽 YA）

タイプⅡ：カジュアル・フォーマル両場面でネを用いるタイプ（東京山の手 YA）

タイプⅢ：フォーマル場面でのみネを用いるタイプ（京都市 YA）

このことをまとめると次の表8のようになる。

[表8 ネの使用のタイプ]

	Ⅰ（津軽 YA）		Ⅱ（東京山の手 YA）		Ⅲ（京都市 YA）	
	カジュ アル	フォー マル	カジュ アル	フォー マル	カジュ アル	フォー マル
ネの使用	×	×	○	○	×	○

以下では、間投助詞のあらわれ方が方言間で異なり、上に挙げたような3つのタイプに別れることを、出現した形式や出現比率から説明する。§4 で今回分析対象とする形式と分析方法について説明したあと、§5 で具体的な分析をおこなう。

¹ フォーマル場面でしかあらわれないと考えられるデスネを含む。

4. 対象とする間投助詞と分析方法

本稿では、次にあげるような形式に後続するものを「間投助詞」と認定し、分析対象とした。

- ▶ 接続助詞、接続詞、副詞、副助詞（は・も）、格助詞、名詞、フィラー
動詞・形容詞・形容動詞・助動詞の連用形・テ形

分析対象とする間投助詞の例をあげる。

- [3] 656YA: やじゃん なんか 名前 変わってるってさ一 まん 無くなるより いーけどさ
二 さらっさらにさ一、 [東京山の手: 若-若]
- [4] 356YA: 長野とかのが いーんだよな? だ《だから》長野だったらね一 も ハッピーな
んだけどね一。 [東京山の手: 若-若]
- [5] 250YA: [でも] 僕 これな、京都弁の研究 思ってな一↑、(YC: うん) 京都弁と 思いつ
くの まず あれや、{間}(YC: うん↑) 舞妓さんや。 [京都市: 若-若]
- [6] 021YA: ま一な。だばって、別に 残業って あるわけでね一し。(YA: ん一)部活は行が
にや一まいけど。(YA: ん一)部活ったって、ただ見ちゅ一だけだはんでな。
[津軽: 若-若]
- [7] 546YA: そ一ですね一、うん一、少なくなってますからね一。 [東京山の手: 若-調]
- [8] 400YA: うん。で その、東西の 通りはね↑ けっこ一 メジャー なんですけどね↑
[京都市: 若-調]

しかし、文末の述語をつくる動詞・形容詞・形容動詞・助動詞等に後続する次のようなものは「終助詞」と見なして分析対象から除外した。以下に例をあげる。

- [9] 050YA: じゃ 結構 あれやな一。そ一 考えると ニューヨークって やっぱ 高いよな一。
[東京山の手: 若-若]
- [10] 156YA: でも うちの 家と おんなじことやもんな↑ [京都市: 若-若]
- [11] 037YA: 野球って やっぱ 教えて一人 いるばな、いっぺ。(YA: あ一)一番 大変だ
んずな。 [津軽: 若-若]
- [12] 222YA: あれあ、新宿の 高層ビルですね一。 [東京山の手: 若-調]
- [13] 324YA: うん、ま一、くらべられますね↑ よく。 [京都市: 若-調]

前節表7で提示した数字は、上に示した基準で認定し、カウントしたものである。

松丸・辻(2002)などSSコーパス ver.1.0を用いた間投助詞の分析では、各場面の談話においてどのような形式がいくつ出現したかをカウントするという方法がとられている。この方法では形式の対立を明らかにすることはできるが、場面によって違いが見られると考えられる間投助詞の出現比率を見ることができない。そこで本稿では、談話の文節末を

間投助詞が出現可能な位置としてカウントし、その位置における間投助詞の出現数から出現比率を示し、分析する。下の [14] を例にとると、□で示した間投助詞が出現可能な7箇所の文節末のうち3箇所で実際に間投助詞「サ」が用いられていると見る。

[14] 656YA: やじゃん なんが□ 名前□ 変わってるってさー ま□ ん 無くなるより□ いー
 けどさー さらっさらにさー、 [東京山の手: 若一若]

分析対象となる間投助詞は、共通語的なネの他にナ（津軽・東京山の手・京都市）、サ（津軽・東京山の手・京都市）、ヨ（津軽）があらわれた。これらは分布や機能に違いがあり、厳密な意味でのバリエーションとは言えない。例えば、ネ以外の形式は丁寧体の文とは非常に共起しにくい。また高木（2000）は、関西で用いられるサは話題が新たに導入される場合に用いられ、その話題の中ではナでターンを確保するといった役割分担があると述べている。しかし本稿では、そのような個別的な違いをひとまず保留して等しく間投助詞として扱い、その出現比率に注目して分析する。

5. 分析

本節では、まず、§ 5.1. で間投助詞の出現数・出現比率を提示し、場面による間投助詞の使用の切換えを方言別に説明する。次に § 5.2. で切換えがどのような意識によるものか、解釈を加える。

5.1. 結果

各談話における間投助詞の出現数と出現比率をまとめると次ページの表9のようになる。なお、津軽 YA [若一若] では、他の談話に比較して間投助詞の出現数が極端に少なくなっているが、これは表2注1で述べたように文字化データを公開していない部分があり、分析可能な談話量が少ないためである。表中では、間投助詞が出現可能な位置にあらわれなかった箇所をφであらわす。また、各セルの上段に間投助詞の出現数、下段のかっこ内に出現比率（単位は%）を示す。

表9からは、次のことがわかる。

- (1) 全談話を通し、間投助詞の出現比率は概ね1割以下にとどまる。
- (2) 津軽 YA は、《対若》ではナをもっとも多く用い、ヨがそれに続く。さらに、サも1例のみ用いられた。《対若》での間投助詞の出現比率は、他方言の話者・場面と比較するともっとも高くなっている。

[15] 021YA: まーな。だばって、別に 残業って あるわけでねーし。(YA: んー) 部活は 行が
 にゃーまいけど。(YA: んー) 部活ったって、ただ 見ちゅーだけだはんでな。

[津軽 YA: 若一若]

[表 9 間投助詞の出現数と比率]

	津軽 YA		東京山の手 YA		京都市 YA	
	対若	対調	対若	対調	対若	対調
デスネ	-	-	-	2 (0.7%)	-	2 (1.7%)
ネ	-	-	61 (39.6%)	92 (32.2%)	1 (0.8%)	64 (54.9%)
ナ	19 (77.6%)	-	31 (20.1%)	-	43 (36.2%)	-
サ	1 (4.1%)	-	58 (37.6%)	-	5 (4.2%)	-
ヨ	6 (24.5%)	-	-	-	-	-
間投助詞 合計	26 (106.1%)	-	150 (97.3%)	94 (32.9%)	49 (41.2%)	66 (56.7%)
φ	219 (893.9%)	840 (1000%)	1391 (902.7%)	2764 (967.1%)	1140 (958.8%)	1099 (943.3%)
合計	245	840	1541	2858	1189	1165

[16] 041YA:ま、高校ほどこで ねーはんでな。つーが、高校にも よるけどよ。それによ、中学
校、軟式だばな。(YA:ん)高校の 野球ど 全然 違うしよ。 [津軽 YA:若-若]

[17] 379YA:へば、山田はさ。 [津軽 YA:若-若]

いっぽう《対調》では、共通語的なネを含め、間投助詞をまったく使用していない。
他の2地域の《対調》ではケドの後ろでネが多く用いられ、東京山の手 YA は91例
中34例、京都市 YA も50例中7例という高い比率でネを使用した。しかし、津軽
YA はケドの後ろにおいても、[18]のように、やはりネを用いていない。

[18] 042YA:あのφ、硬式はφ わかんないんですけどφ (YF:えー) 軟式野球はφ、そ
のφ、そのφ 年にφ よってφ 全国大会のφ やるφ 場所がφ 違うんです
けどφ。(YF:あつ そうなんですか) いろんなφ 地区でφ。はい。

[津軽 YA:若-調]

(3) 東京山の手 YA は、《対若》ではネとサを多く用い、その比率は同程度である。さら
に、[21]の例のように、関西方言で多用されるとされるナも少なからず用いられて
いる。

[19] 070YA:だって あのー、前ねー あのー どっちだっけ、カオルン島じゃなくて 香港島、
(YC:うん)香港島の 方のねー えーつとねー サウスパシフィック とかって ホ
テルが あったのよー、(略) [東京山の手 YA:若-若]

[20] 532YA:え だって お前 そのままさー ち、忠実に 実行して どーすんだよ お前 そ
のままさ 直江津支社からさー [東京山の手 YA:若-若]

- [21] 168YA:あー。でもな、そっか そー 考えると きついなー 確かにな あーゆー
あんまりね 強い 建物 建てる ってゆーのもね、〔東京山の手 YA:若-若〕

《対調》ではネを多用し、ナやサは用いなかった。また、改まった場面でのみ用いられると考えられるデスネもあらわれた。

- [22] 422YA:や 一時期 すごいね、1年 2年ぐらい 前はね すごい ぐっと 上がったんで
すよ。(YF:はい)で なんかね 小淵さんが 死んだあたりからね あの 森首相
ん なってから、〔東京山の手 YA:若-調〕
- [23] 466YA:(略)で 高校が や あの一、##だったんですよ いわゆ ####なんで、(YF:
あー)えー そーするとすね 高校時代から 1時間ちょいの 生活をしてた
んで 別に 苦でも 何でもなかったんです。〔東京山の手 YA:若-調〕

間投助詞全体の出現比率を見ると、《対若》で97.3%と高く、《対調》で32.9%と低くなっている。ただし、この差が統計的に有意であるかについては検定等をおこなう必要がある。

- (4) 京都市 YA は、《対若》ではナを主に用いている。また、ネとサもわずかながらあらわれた。

- [24] 456YA:そん^でもー 俺 古典はな、授業は き、あ、最初 聞^一とって、(YC:うん)
で、ある程度^一、わかるやん[↑] (YC:うん) ほなら もー 自分で^な 別の^一 そ
ゆー、教材を、(YC:うん) 自分で 買って 読んでんねん。
〔京都市 YA:若-若〕
- [25] 054YA:や でも、向^この 親には やっぱりね[↑] 〔京都市 YA:若-若〕
- [26] 686YA:そのさ、親戚 やったら、一日間とか、(YC:あー) 兄弟やったら、まー あ そー
か 三日間とか。 〔京都市 YA:若-若〕

いっぽう《対調》ではネを多用し、ナやサは用いなかった。また東京山の手 YA と同様、デスネもあらわれた。

- [27] 534YA:あのね 僕 笛がね 苦手なんですよ。(YF:あー) あの 横笛 音^一 出すの
がね[↑]。 〔京都市 YA:若-調〕
- [28] 038YA :あのね、西陣織^一、関係ですね、(YF:はい) 金襴 って ゆーの^一 がある
んですよ。 〔京都市 YA:若-調〕

間投助詞全体の比率は、《対若》で 41.2%、《対調》で 56.7%でそれほど大きな差ではないが《対調》の方が若干多く、東京山の手 YA とは比率が逆になっている。

- (5) 東京山の手 YA と京都市 YA は、ともに《対調》でネを用いている点で共通している。しかし、ネが用いられた例を見ると、分布に違いがあることがわかる。東京山の手 YA では、丁寧体の文の従属節末で、デス・マスの後にあらわれた例が半数を超えている。いっぽう京都市 YA では、デス・マスの後ではない例が多く、デス・マスの後にあらわれた例の 3 倍近くである。下の表 10 で環境別のネの出現数と比率を示し、例をあげる。

〔表 10 ネの分布に注目した間投助詞の出現数と比率〕

	津軽 YA		東京山の手 YA		京都市 YA	
	対若	対調	対若	対調	対若	対調
デスネ	-	-	-	2 (0.7%)	-	2 (1.7%)
デス・マス +ネ	-	-	-	49 (17.1%)	-	16 (13.7%)
デス・マス 以外+ネ	-	-	61 (39.6%)	43 (15.0%)	1 (0.8%)	48 (41.2%)
ナ	19 (77.6%)	-	31 (20.1%)	-	43 (36.2%)	-
サ	1 (4.1%)	-	58 (37.6%)	-	5 (4.2%)	-
ヨ	6 (24.5%)	-	-	-	-	-
間投助詞 合計	26 (106.1%)	-	150 (97.3%)	94 (32.9%)	49 (41.2%)	66 (56.7%)
φ	219 (893.9%)	840 (1000%)	1391 (902.7%)	2764 (967.1%)	1140 (958.8%)	1099 (943.3%)
合計	245	840	1541	2858	1189	1165

- [29] 416YA:わ 今なんても どん底^{です}けどねー {笑い} (YF:{笑い}) もー だ《だから》 すごかったですよ だから いかに 税金逃れ するか とか 言った 世界^{でした}からねー、(YF:はー) んー 黒字 黒字 黒字で、(YF:へー) で 車 1台 買って 税金 どかして みたいな 感じ^{でした}からねー、(YF:へー) それが 今じゃ、{笑い} (YF:{笑い}) {笑いながら} どーやって 借金を、てゆー 世界ん なって^{ます}からねー。 [東京山の手 YA:若一調]
- [30] 498YA:(略)そこはねー あの一 し 綾傘鉾と 四条傘鉾と ゆー 二基 あるんですよ、傘鉾はね↑ (YF:はい) で、そこが、ちょっとね↑ 踊りーが つくんですよ。踊り手が。 [京都市 YA:若一調]

表 10 からは次のように言える。デス・マスの後にはあらわれるネの出現比率は東京山の手 YA (17.1%) と京都市 YA (13.7%) とのあいだに大きな差がない。いっぽう、デス・マスの後ではないネの出現比率は、京都市 YA (41.2%) が東京山の手 YA (15.0%) を上回っている。

5.2. 解釈

前節で示した結果から、次のような解釈が可能である。

- (a) 3 方言の話者は、ともに、ネ以外の形式をぞんざいな形式と捉え、カジュアルな場面では用いるが、フォーマルな場面では用いないという切換えをおこなっていると考えられる。また津軽方言については、阿部・坂口 (2002) が、文法形式において方言形式と共通語形式の共起が許容されない場合があることを指摘している。津軽 YA の《対調》談話はほぼ共通語で話されており、間投助詞についても方言形のナやヨがそこで用いられることはないとも考えることもできる。
- (b) 津軽 YA が《対若》では他の 2 つの方言話者に比較して間投助詞を多く用いたのにも関わらず、《対調》でまったく間投助詞を用いていないこと (§ 5.1. (2)) について、次の 2 つの解釈が考えられる。ひとつは、津軽方言では、たとえ共通語的なネであっても、フォーマル場面では間投助詞の使用自体がぞんざいさをあらわすことになるということである。もうひとつは、津軽方言ではフォーマル場面では接続詞や否定表現、格助詞などさまざまな項目において共通語形式が用いられるが (阿部・坂口 2002)、間投助詞ネは過度に共通語的であると捉えられるため、使いにくい、もしくは使えないということである。間投助詞は他の多くの文法的な形式とは異なり、意味の伝達を左右するものではないため、省略が可能だと考えることができる。
- (c) 東京山の手 YA の間投助詞の使用が《対調》で減少したこと (§ 5.1. (3)) から、津軽方言について述べたのと同様、東京山の手方言でも間投助詞の使用はぞんざいさをあらわすと考えられる。ただし、カジュアル場面より減少したとは言え、フォーマル場面でも使用が少なくない。ここから、フォーマル場面で間投助詞を用いないという制限は、津軽方言ほど強くないと言える。

なお、§ 5.1. (5) より、東京山の手方言において使用されるネのうち、ぞんざいさをあらわすのはデス・マスと共起しないネであり、丁寧体の文でデス・マスの後ろで用いられるネはぞんざいさをあらわすマーカにはならないと考えられる。終助詞のネは、フォーマル場面においても頻繁にあらわれ、ぞんざいさはあらわさないことが予想できる。ここから、デス・マスが付くことでより文に近づいた節末では、間投助詞の機能は終助詞のそれに近くなり、フォーマル場面で用いても失礼にはならないと

考えられるのではないか。下に終助詞ネが用いられた例を挙げる。

- [31] 026YA:きばあ《希望は》輸送ですね。やっぱ 方向的には 一緒なんですけどー、
[東京山の手:若一若]
- [32] 066YA:理系ですねー もー、(YF:は一) パリパリ 理系ですね やっぱり ###研《###
研究室》に 居ると。 [東京山の手:若一若]

- (d) 京都市 YA は、§ 5.1. (4) より、カジュアル場面では方言形ナを使用し、フォーマル場面では共通語形ネを使用するというカテゴリカルな切換えをおこなっていると考えられる。ここから、京都市方言では、共通語形ネは方言形ナよりも丁寧な語形と捉えられていると解釈できる。

また、京都市方言ではデス・マスと共起するか否かに関わらずネの使用がフォーマル場面で多く見られ、上記 (c) で述べた東京山の手方言で見られる傾向とは異なる。

- (e) 東京山の手方言と京都市方言では、デス・マスと共起しないネがフォーマル場面で避けられる (東京山の手) か、多用される (京都市) かという点で異なる。なぜこのような違いが見られるのかについて、現時点での考えを述べる。

両者はそれぞれ、サ (東京山の手) ・ナ (京都市) というカジュアル場面専用の間投助詞の形式を持つ。京都市方言では、このナが方言形として捉えられるいっぽうでネは共通語形だと認識されるため、ネの価値が高くなりフォーマル場面で多く用いられると考えられる。いっぽう、東京山の手方言におけるネは、とりたてて共通語形として意識されてはいないのではないか。そのため、ネは、サよりは丁寧であるものの改まりをあらわすというところまでは至らず、フォーマル場面では使用が避けられるのではないか。

6. まとめと今後の課題

本稿では、間投助詞の出現の仕方に方言間の違いがあり、共通語形ネの使用・捉え方に注目すると3つのタイプに分類できることを示した。まとめると次のようになる。

(a) タイプ I (津軽方言)

津軽方言においては、デス・マスと共起するか否かに関わらず、間投助詞の使用自体がぞんざいさをあらわすマーカーになると考えられ、フォーマル場面ではまったく用いられない。ネが共通語的すぎるために使用が避けられる可能性もある。

(b) タイプ II (東京山の手方言)

東京山の手方言においては、ネ以外の形式はぞんざいさをあらわすマーカーになる。共通語形ネは、デス・マスと共起すればぞんざいさをあらわさないが、デス・マスと共起しないネはぞんざいさをあらわす。しかし、フォーマル場面における間投助詞使

用の制限は津軽方言ほど厳格でない。

(c) タイプⅢ (京都市方言)

京都市方言においては、ネ以外の形式はぞんざいさをあらわすマーカになる。いっぽう共通語形ネは、デス・マスと共起するか否かに関わらず、ぞんざいさをあらわさないためフォーマル場面で多用される。方言形ナが存在が共通語形ネの価値を上げていると考えられる。

本稿では、それぞれの形式が持つ機能の個別的な違いを保留し、一括して「間投助詞」として分析した。今後は、機能の違いにも注目し、各方言・各場面における間投助詞の出現の仕方を詳細に見る必要があると考える。

【参考文献】

- 阿部貴人・坂口直樹 (2002) 「津軽方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号
- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 宇佐美まゆみ (1997) 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 高木千恵 (2000) 「関西における間投助詞『サー』の使用実態」地域言語研究会『地域言語』第12号
- 辻加代子 (2003) 「京都市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第5号
- 西原菜奈子 (2004) 「東京山の手方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第6号
- 松丸真大・辻加代子 (2002) 「東京下町方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号

しのはら れいこ (大阪大学大学院生)

r_shinohar@hotmail.com